

3. 児童センターにおける幼児・学童の体力・運動能力の測定法に関する研究

研究協力者 小林 芳文（国立横浜大学）

小山 一宏（日本教育開発センター）

1. 研究目的

小児の心身の発育状態の評価は、障害の早期発見や健康・体力増進の指標等を得るために、さまざまな機会をとらえて、さまざまな方法においてなされている。小児の発達段階に応じて、1才6カ月児健診、3才児健診、就学児健診等が実施され、さらに、日常的にも、幼児期にあっては、幼稚園や保育所における観察や健康診査、学童にあっては、小学校における体力測定や健康診査等が実施されている。

このように、小児の心身の発育状態の評価その障害のスクリーニング等については、行政的にも、また、教育的・福祉的にも十分になされているものではあるが、小児の心身の障害発生の予防・早期発見・治療を真に遂行するためには、小児の生活するあらゆる場と機会を通じて、常になされることが重要なことである。

昭和53年度より、地域社会における幼児児童の体力増進活動を推進せんとする児童センターが全国に設立されているが、それは、同時に、幼児・児童の心身障害の早期発見や指導に直接的に結びつくスクリーニングの場としても機能する施設でもあると考えられる。

そこで本研究においては、児童センターにおいて、小児の体力——主として、運動機能の発達状態を簡易に評価でき、且つ、体力増進指導に直接的に結びつけることの可能な体力測定法を作成せんとするものである。

2. 研究方法

昨年度の文献研究を基礎として、幼児については、5才児に焦点を合わせ、学童については、8才児に焦点を合わせて測定項目を作成し、基礎調査を実施した。

3. 研究結果

(1) 幼児体力・運動能力測定法（5才児）

項目1. 両足をそろえて60cm以上跳ぶことができる。（イ できる……+ , ロ でき

ない……—，以下記号にて示す)

解説：短時間に最高の筋力を出す能力，つまり，瞬発力を測定する。筋力の発達を知る指標となる。

項目 2. 立った姿勢から，体を前にまげて，両手の指先を床につけることができる。

(イ………+，ロ………-)

解説：身体または，関節の可動域により柔軟性をみる。

項目 3. 鉛筆で 10 秒間に 30 回以上，紙に点を打つことができる。(イ………+，ロ………-)

解説：小筋群が働く局所的な運動能力であり，手先きの運動の速さを測定する。

項目 4. ドッチボールを片手で 3 回以上つくことができる(イ………+，ロ………-)

解説：ボールを片手でつくためには，目と手の協応運動が必要である。視知覚運動の協応性をみる。

項目 5. 10 cm巾の板を片足で左右に連続して 2 往復跳ぶことができる。

(イ………+，ロ………-)

解説：身体の動きのアンバランスな状態において，いかに自己の身体を制御できるかをみる。

項目 6. 片足をあげ，眼を閉じたままで 3 秒間，立つことができる。(+ ， -)

解説：静的平衡性の発達をみる。

項目 7. 片足ケンケンを 5 m できる(+ ， -)

解説：動的平衡性の発達をみる。

項目 8. ひもを「かた結び」に結ぶことができる。(+ ， -)

解説：小筋群の朽ち性をみる。指先きの微細な動作をひも操作でとらえる。

項目 9. なわとび，連続して 3 回以上できる。(+ ， -)

解説：物体制御と身体リズム性をみる。

項目 10. あお向きに寝た姿勢から，起き上がりが機敏にできる。(3 秒以内)(+ ， -)

解説：敏捷性の発達をみる。

(2) 小学校低学年児童体力・運動能力測定法(8 才児＝小学 3 年生基準)

項目 1. 連続片足とびを 30 秒間行えるか，又は，50 m 以上移動できる(+ ， -)

解説：筋持久性および全身持久性をみる。

項目 2. 両足をそろえて 100 cm 以上跳ぶことができる(+ ， -)

解説：瞬発力をみる。

項目 3. 立った姿勢から、体を前に曲げて、両手の指先きを床につけることができる。

(+, -)

解説：柔軟性をみる。

項目 4. ドッチボールを両手で持ち、股間から前方へ 6 m 以上投げることができる。

(+, -)

解説：物体の制御性をみる。

項目 5. 鉛筆で 10 秒間に 50 回以上、紙に点をうつことができる。(+, -)

解説：小筋群の敏捷性をみる。

項目 6. あお向きに寝た姿勢から、おき上がりが機敏にできる。2 秒以内。(+, -)

解説：敏捷性をみる。

項目 7. 片足をあげ、眼を閉じたままで 15 秒間立つことができる。(+, -)

解説：静的平衡性をみる。

項目 8. 3 m の長さのマットの上を、8 秒以内で横転しながら移動できる。(+, -)

解説：身体の制御性をみる。

4. 小児の精神身体発育からみた初期環境における Separation Deprivation の影響に関する研究

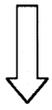
研究協力者 網野 武 博 (日本総合愛育研究所)

萩原 英 敏 (同 上)

金子 保 (淑徳大学)

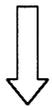
1. はじめに

乳幼児の発達環境が、その後の精神身体発育にさまざまな影響を及ぼすとの指摘がある。とくに乳幼児期の分離 (Separation) 及び喪失 (Deprivation) の経験を無視することはできない。これについては、前年度において欧米の文献を中心に検討し、論考したところである。本研究は、その文献研究に引き続き計画された実証的研究の一部である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

小児の心身の発育状態の評価は、障害の早期発見や健康・体力増進の指標等を得るために、さまざまな機会をとらえて、さまざまな方法においてなされている。小児の発達段階に応じて、1才6ヵ月児健診、3才児健診、就学児健診等が実施され、さらに、日常的にも、幼児期にあっては、幼稚園や保育所における観察や健康診査、学童にあっては、小学校における体力測定や健康診査等が実施されている。

このように、小児の心身の発育状態の評価その障害のスクリーニング等については、行政的にも、また、教育的・福祉的にも十分になされているものではあるが、小児の心身の障害発生の予防・早期発見・治療を真に遂行するためには、小児の生活するあらゆる場と機会を通じて、常になされることが重要なことである。

昭和53年度より、地域社会における幼児児童の体力増進活動を推進せんとする児童センターが全国に設立されているが、それは、同時に、幼児・児童の心身障害の早期発見や指導に直接的に結びつくスクリーニングの場としても機能する施設でもあると考えられる。

そこで本研究においては、児童センターにおいて、小児の体力一主として、運動機能の発達状態を簡易に評価でき、且つ、体力増進指導に直接的に結びつけることの可能な体力測定法を作成せんとするものである。